

小野篁関係史料集成

－正史編－

仁 藤 智 子

【キーワード】 小野篁・承和の遣唐使・法隆寺僧善愷訴訟・嘉祥改元
紀夏井・菅原是善

はじめに

『篁物語』の主人公である小野篁は、実在した平安初期の人物である。篁の父である小野岑守は、大同四（809）年、従七位上から従五位下に昇叙（右少弁）、同時に春宮亮（後の嵯峨天皇）となった人物である。その後、嵯峨天皇即位とともに、侍読に採用され、漢詩集『凌雲集』の編纂や、『日本後紀』・『内裏式』の編纂にも携わった。弘仁六（815）年には陸奥守として、吉弥候部等波醜ら俘囚を帰順させるという功績によって、嵯峨天皇から賞賛の詔勅を賜った。帰京後は橘嘉智子の皇后宮大夫や参議（大宰大貳）を勤めていた。篁を考える際に、父岑守からの影響やその人物関係を無視して考えることはできない。

篁の薨伝には「薨時年五十一」とあるので、逆算すると篁は延暦二十一（802）年ごろの生まれである。彼の薨伝（資料37）の分析及び東宮学士としての活躍については既に触れたので、前稿「二人の東宮恒貞・道康と東宮学士小野篁」（『国士館人文学』7号、2017年3月）参照していただきたい。

今回は、正史に見える小野篁の姿を追ってみた。『篁物語』に見える、異母妹に執着し、悲恋に身を焦がす篁像や右大臣の婿となりながらも亡くなった異母妹に思いを残す逸話とは異なる篁像が、正史の記述から浮かび上がってくる。このような彼の人生で特筆すべきは、第一に承和の遣唐使拒否事件（史料1～18）、第二に法隆寺僧善愷訴訟事件（史料24～26、37～39）であろう。この事件以降、篁の周辺に伴善男が後塵を拝するかのように出没することも留意される。ほかにも、嘉祥改元の奏上（史料31）、この時期に来朝していた渤海使への対応にあたったこと（史料33）などもみえる。

また、彼の交友・師弟関係のあった人物も散見する。その一人が紀夏井である。彼は清貧を好み、文武天皇からの信頼の厚い官人の一人であったが、応天門の変に異母弟豊城がかかわると、連座して土佐国に配流された。彼は隸書が得意であっ

たが、書を篁に習ったと伝わる。隸書だけでなくその腕前から「真書（楷書）の聖」と賞賛されたという。書道を介して、篁とは師弟関係にあったことが知られる（史料 39）。

さらに、もう一人菅原是善があげられる。是善は菅原清公の子で、著名な道真の父親である。延暦の遣唐使の一行として入唐した後、学識を買われて長年文章博士を勤めた人物であるが、篁を詩歌の宗匠と仰いだことが知られる（史料 40）。

今回は、小野篁に関する資料のうち、正史にみえる篁関連史料を収集した。さらに、文末に年譜を再録し加筆した。『本朝文粹』や『江談抄』等に関しては、紙幅の制限もあり、別の機会に触れることにしたい。

小野篁関係資料集成 一正史編一

（凡例）六国史の原文は、新訂増補国史大系『続日本後紀』『文徳天皇実録』（吉川弘文館）によるが、一部、白文である。

（1）承和の遣唐使事件

1 『続日本後紀』承和元年（834）正月庚午条

庚午。（中略）是日。任_二遣唐使_一。以_二参議從四位上右大弁兼行相摸守藤原朝臣常嗣_一爲_二持節大使_一。從五位下彈正少弼兼行美作介小野朝臣篁爲_二副使_一。判官四人。録事三人。

→篁が遣唐使副使に任命される（從五位下）。この時の大使は藤原常嗣。大使1名、副使1名、判官4名、録事3名の四等官構成。30余年ぶりの発遣事業であった。『延喜式』大蔵省条には、「入諸蕃使」として、渤海や新羅への派遣する使節と並んで遣唐使の構成が見える。仁明天皇が国家事業の一つとして再興した承和の遣唐使については、佐伯有清『最後の遣唐使』（講談社学術文庫、2007年／初出1978年）が詳しい。事実上、国家事業として渡海する最後の使節となった。なお、これ以前の篁の官歴については薨伝（史料 37）を参照。

2 『続日本後紀』承和二年（835）正月癸丑条

癸丑。天皇御_二豊樂院_一。宴_二百官於朝堂_一。詔授_二從三位源朝臣信正三位_一。從四位下藤原朝臣良房從四位上。從五位上永野王正五位下。從五位下三繼王。津守王並從五位上。无位嶋江王。正六位上廣坂王並從五位下。從四位下藤原朝臣廣敏。紀朝臣善岑。百濟王勝義並從四位上。正五位下田口朝臣佐波主從四位下。從五位上藤原朝臣長岡。當宗宿祢家主並正五位下。從五位下藤原朝臣行道。紀

朝臣名虎。高階真人石川。永原朝臣門繼。小野朝臣篁並從五位上。正六位上藤原朝臣廣野。文室朝臣邑樂。橘朝臣宗雄。藤原朝臣豐仲。伴宿祢諸山。安倍朝臣濱成。紀朝臣鷹守。出雲宿祢岑嗣並從五位下。外從五位下御船宿祢賀・外正五位下。正六位上廣井宿祢弟名。長峯宿祢高名。刈田首種繼。宋人朝臣垣麻呂。春岑朝臣廣津麻呂。門部連貞宗。大村直福吉並外從五位下。宴畢賜_レ祿各有_レ差。』左京人遣唐史生道公廣持賜_レ姓當道朝臣。和銅年中。肥後守正五位下道君首名。治迹有_レ聲。永存_レ遺愛。廣持是首名之孫也。

→豊樂院で行われた正月節会において、篁は從五位上に叙される。同日、遣唐史生道公廣持も當道朝臣という姓を賜った。

3 『続日本後紀』 承和二年（835）正月丁巳条

丁巳。正三位源朝臣信爲_レ近江守。左兵衛督如_レ故。正四位下源朝臣弘爲_レ信濃守。宮内卿如_レ故。從五位上小野朝臣篁爲_レ備前權守。遣唐副使彈正少弼如_レ故。三品秀良親王爲_レ大宰帥。彈正尹如_レ故。

→県召で、篁は備前權守を、遣唐副使・彈正少弼と兼任する。遣唐使などの国司兼任（權官）はよくあることである。

4 『続日本後紀』 承和二年（835）十二月壬申条

壬申。借_レ遣唐使位。大使從四位上藤原朝臣常嗣正二位。副使從五位上小野朝臣篁正四位上。並大臣口宣。不_レ授_レ告身。

→遣唐大使となった藤原常嗣に正二位、副使小野篁に正四位上が、告身ないままで授けられた。これを「借位」という。遣唐使に威厳をつけるための措置。

5 『続日本後紀』 承和三年（836）正月丁未条

丁未。天皇御_レ豊樂院。宴_レ百官於朝堂。詔授_レ從四位上藤原朝臣常嗣正四位下。无位時宗王從四位下。從五位上大縣王正五位下。正六位上弟綱王。愛宕王並從五位下。正五位上源朝臣寬從四位上。正五位下坂上大宿祢淨野。藤原朝臣長良。安倍朝臣安仁並從四位下。從五位上丹墀真人清貞。小野朝臣篁並正五位下。從五位下藤原朝臣眞主。丹墀真人興宗。安倍朝臣濱主。石川朝臣英多麻呂。良峯朝臣木連。橘朝臣峯繼並從五位上。外正五位下廣宗宿祢糸繼。紀朝臣國守。正六位上藤原朝臣吉繼。藤原朝臣俊繼。文室朝臣笠科。紀朝臣綱雄。橘朝臣千枝。橘朝臣起奈理。藤原朝臣板野麻呂。淡海真人眞淨。清瀧朝臣河根。大原真人宗吉。大中臣朝臣天足並從五位下。正六位上蕃良朝臣弟主。山田宿祢古嗣。住吉朝臣氏繼。御船宿祢清風。物部首廣國並外從五位下。賜_レ祿有_レ差。

→豊樂院で行われた正月節会において、篁は正五位下に叙される。大使常嗣も正四位下になった。

6 『続日本後紀』 承和三年（836）四月壬辰条

壬辰。天皇御_二紫宸殿_一。賜_二餞入唐大使藤原朝臣常嗣。副使小野朝臣篁等_一。命_二五位已上_一。賦_レ賜_二餞入唐使_一之題_上。于時大使常嗣朝臣欲_レ上_レ壽。先候_二進止_一。勅許訖。常嗣朝臣避_レ座而進。喚_二采女_一二聲。采女擎_二御盃_一。來授_二陪膳采女_一。常嗣朝臣跪唱_レ平。天皇爲_レ之舉訖。行酒人進_二賜常嗣朝臣酒_一。即跪受飲竟。降_レ自_二南階_一。拜舞還_レ座。既而群臣獻_レ詩。別有_二御製_一。大使賜而入_レ懷。退而拜舞。賜_二大使御衣一襲。白絹御被二條。砂金二百兩_一。副使御衣一襲。赤絹被二條。砂金百兩。各湍醉而罷。

→紫宸殿において遣唐使として拜命以下の儀礼が始まる。出御した仁明天皇より、錢貨・酒杯・御製の詩などを賜る。拜舞ののち、大使常嗣と副使篁は御衣・被・砂金などを下賜される。

7 『続日本後紀』 承和三年（836）四月丁酉条

丁酉。賜_二入唐使節刀_一。大臣口宣曰。「天皇_我大命_{良万止}、遣_二唐國_一使人_尔詔大命_乎、衆聞食_止詔_布。大使共稱_レ唯_〇。今詔_{久波}、藤原常嗣朝臣、小野朝臣篁。今汝等二人_乎遣_二唐國_一者、今始_豆遣物_{尔波}不_レ在。本來朝使其國_尔遣_之、其國_{与利}進渡_{祁里}。依_レ此_豆使次_止遣物_曾。悟_二此意_一豆、其人等_乃和_美安_美應_レ爲_久相言_部、驚_{呂之伎}事行_{奈世曾}。亦所_レ遣使人判官已下、有_下犯_二死罪已下_一者_上、順_レ罪_豆行_{止之豆}、節刀給_{久止}詔大命_乎聞食_止宣_布。」賜_二大使副使各御衣被_一。遣唐醫師山城國葛野郡人朝原宿祢岡野改_二本居_一。貫附_二左京四條三坊_一。

→遣唐使に節刀が賜与される。大臣によって宣命が宣られる。また、随行する医師として朝原宿祢岡本の名も見え、本貫を山城国葛野郡より平安京左京に移される。

8 『続日本後紀』 承和三年（836）五月庚子条

五月己亥朔庚子。授_二无位小野神從五位下_一。依_二遣唐副使小野朝臣篁申_一也。山城國人遣唐史生大宅臣福主改_レ臣賜_二朝臣_一。

→篁の申請により、篁の氏神である小野神に神階があたえられる。遣唐史生の大宅臣福主が朝臣の姓を賜った。さらに10日には、入唐しながら没した8名（藤原清河・安倍仲麻呂・石川道益・紀馬主・田口養年富・甘南備信影・紀三寅・掃守明）の靈魂を慰撫する異例の措置がとられた。14日に遣唐使一行は難波を出発するが直後に暴風雨に遭う。遣唐使の無事を祈って山階山陵などへ奉幣が行われる。7月に博多より出航。

9 『続日本後紀』 承和三年（836）七月壬辰条

壬辰。勅_二符副使小野朝臣篁_一。得_二今月八日飛驒奏狀_一。知_レ歸_二着肥前國松浦

郡別島也。近聞。第一第四兩隻船。半路漂廻。疾懷未弭。尋省茲奏。轉以驚嗟。本謂忠貞必蒙利往。不知此行何負幽明。雖無巨災。艱虞足患。今案來奏。船舶有損。艇艇亦失。還大宰府。繕補其不完不足者。然後与持節使等。共果國命。

→渡航失敗。篁の乗った第2船は肥前松浦郡別島に帰着。第1船・第4船が漂流して肥前国に帰る。第3船は、8月になって対馬に漂着（生存者25名）。9月遣唐大使常嗣が入京して節刀を返還する。

10『続日本後紀』承和三年（836）十二月丁酉条

十二月乙未朔丁酉。遣新羅國使紀三津復命。三津自失使旨。被新羅誣切販來。何則所以遣三津於新羅者。遣唐四ヶ船。今欲渡海。恐或風變漂着彼境。由是准之故實。先遣告諭。期其接授。而三津到彼。失本朝旨。稱專來通好。似畏怯媚託。私自設辭。執事省疑与太政官牒相違。再三詰問。三津逾增迷惑。不能分疏。是則三津不文。而其口亦訥之所致也。故執事省牒中云。兩國相通。必無詭詐。使非專對。不足爲憑。但其牒中亦云。「小野篁船帆飛已遠。」未必重遣三津聘于唐國。夫修聘大唐。既有使頭。篁其副介耳。何除其貴。輕舉其下。加以當尔之時。篁身在本朝。未及渡海。而謂帆飛已遠。斯並聞商帆浮說。妄所言耳。荷校滅耳。蓋在茲歟。又三津介綠衫。孤舟是駕。何擬爲入唐使哉。如此異論。近于誣罔。斯事若只存大略。不詳首尾。恐後之觀者莫辨得失。因全寫執事省牒附載之。

新羅國執事省牒 日本國太政官

紀三津詐稱朝聘兼有贊監。及檢公牒假僞非實者。

牒。得三津等狀稱。奉本王命。專來通好。及開函覽牒。但云修聘巨唐。脱有使船漂着彼界。則扶之送過。無俾滯遏者。主司再發星使。設問丁寧。口与牒乖。虛實莫辨。既非交隣之使。必匪由衷之賂。事無摭實。豈合虛受。且太政官印。篆跡分明。小野篁船帆飛已遠。未必重遣三津聘于唐國。不知嶋嶼之人。東西窺利。偷學官印。假造公牒。用備斥候之難。自逞「白水之」白水之遊。然兩國相通。必無詭詐。使非專對。不足爲憑。所司再三請以正刑章用阻姦類。主司務存大體。舍過責功。恕小人荒迫之罪。申大國寬弘之理。方今時属大和。海不揚波。若求尋舊好。彼此何妨。况貞觀中。高表仁到彼之後。惟我是賴。唇齒相須。其來久矣。事須牒太政官并牒菁州。量事支給過海程糧。放還本國。請處分者。奉判准狀。牒太政官。請垂詳悉者。

→遣唐使船に先立って、朝廷では遣新羅使として紀三津を新羅に発遣し、遣唐使

船が漂着した際には保護・援助してほしい旨を伝えようとした。しかし、三津は新羅の権勢に媚びへつらって、遣新羅使の目的を友好のためと称し私利を求めようとしたために、新羅から送り返された。外交使節としての責務を果たさなかったことが「新羅国執事省牒」によって判明した。そのくだりで、小野篁を遣唐使とする船が（既に失敗しているにも関わらず）出帆していると、新羅に説明していた。このことは外交問題となり、結果的に遣新羅使は終焉することになった。（山崎雅稔「新羅国執事省牒からみた紀三津「失使旨」事件」『日本中世の権力と地域社会』吉川弘文館、2007年、森公章「承和度の遣唐使と九世紀の対外政策」『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文、2008年。鄭淳一「承和三年の新羅国執事省牒にみえる「島嶼之人」『九世紀の来航新羅人と日本列島』、勉誠出版、2015年では、新羅国執事省牒の校訂・校異・書き下しがなされて有益である。）。

11『続日本後紀』承和四年（837）三月甲戌条

甲戌。賜_二錢入唐大使參議常嗣。副使_一篁_一。命_二五位以上_一。賦_下春晚陪_レ錢_一入唐使_一之題_上。日暮群臣獻_レ詩。副使同亦獻_レ之。但大使醉而退出。

12『続日本後紀』承和四年（837）三月丁亥条

丁亥。遣唐副使小野朝臣篁發_レ自_二鴻臚_一。向_二大宰府_一。

→再び、錢を下賜され、餞別の宴の後、再び節刀を賜って、遣唐使らは大宰府にむかう。7月に3隻が博多を出発するも、第二回目も渡航かなわず。第1船・第4船は壱岐嶋に漂着、第2船は値嘉島に漂着した。

13『続日本後紀』承和五年（838）四月乙卯条

乙卯。勅_二遣唐大使藤原朝臣常嗣。副使小野朝臣篁_一。使等本期_三鳳舉用涉_二鼃波_一。心事多睽。滯_二留逆旅_一。朕眷_二言艱節_一。憂_二念于懷_一。方今信風甫臻。嚴程已迫。如_二靡鹽_一何。因_二雲輅往_一。付_レ之示_レ意。仍遣_二從四位下右近衛中將藤原朝臣助_一。勘發之。

→遣唐使の勘發使として藤原助を遣わして、遣唐使の出発を促す。

14『続日本後紀』承和五年（838）六月戊申条

戊申。勘發遣唐使右近衛中將藤原朝臣助奏。副使小野朝臣篁依_レ病不_レ能進發_一。

→勘發使藤原助が、副使篁の病によって出発できないことを奏上。その後、6月に遣唐使船は出発するが、篁が乗船拒否をしたことが報告される。第1船が中国・揚州に到着。12月に大使らは長安に入り、翌年正月に文宗に謁見。3月に大使一向は9隻で蘇州を出発し、海州に向かい、4月に出航。8月に1隻のみ博多に帰着。7隻は肥前国松浦郡に漂着、残りの2隻は行方不明。9月に遣唐大使藤原

常嗣が節刀を返還した。このとき遣唐留学僧常暁が太元帥法を将来した。

15 『続日本後紀』 承和五年（838）十二月己亥条

己亥。（中略）是日。勅曰。小野篁。内含_二綸旨_一。出使_二外境_一。空稱_二病故_一。不_レ遂_二國命_一。准_二據律條_一。可_レ處_二絞刑_一。宜_下降_二死一等_一。處_中之遠流_上。仍配_二流隱岐國_一。初造舶使造_レ舶之日。先自定_二其次第_一名_レ之。非_二古例_一也。使等任_レ之。各駕而去。一漂廻後。大使上奏。更復卜定。換_二其次第_一。第二舶改爲_二第一_一。大使駕_レ之。於_レ是副使篁怨懟。陽_レ病而留。遂懷_二幽憤_一。作_二西道謠_一。以刺_二遣唐之役_一也。其詞牽興多犯_二忌諱_一。嵯峨太上天皇覽_レ之。大怒令_レ論_二其罪_一。故有_二此竄謫_一。

→篁は、大使常嗣との確執で、病と称して乗船を拒否し、「西道謠」を作って、遣唐使事業を批判。嵯峨上皇の逆鱗に触れる。死罪一等を減じて隱岐への遠流となる。（史料 37・下線部（a）参照）

16 『続日本後紀』 承和五年（838）十二月辛亥条

辛亥。追_二小野篁所_レ帶正五位下之告身_一。

→篁は位階の正五位下を剥奪される。

17 『続日本後紀』 承和七年（840）二月辛酉条

辛酉。召_二流人小野篁_一。

→隱岐での配流生活に終止符。篁、都に呼び戻される。

18 『続日本後紀』 承和七年（840）六月辛酉条

辛酉。流人小野篁入京。披_二黃衣_一以拜謝。

→篁、入京する。

(2) 復活した篁

19 『続日本後紀』 承和八年（841）閏九月乙卯条

乙卯。授_二无位小野朝臣篁正五位下_一。詔曰。篁雖_レ期_二奉國_一。猶悔_レ失_レ晨。朕顧_二惟舊_一。且愛_二文才_一。故降_二優貫_一。殊復_二本爵_一。

→篁、本位である正五位下に復活する。

20 『続日本後紀』 承和八年（841）十月辛巳条

辛巳。正五位下小野朝臣篁爲_二刑部少輔_一。從五位下藤原朝臣菊池麻呂爲_二大藏大輔_一。

→篁、刑部少輔になる。

21『続日本後紀』承和九年（842）八月乙丑条

乙丑。（中略）▼是日。立_二皇太子_一。詔曰。「天皇詔旨勅命_手。親王。諸王。諸臣。百官人等。天下公民。衆聞食_止宣。隨_レ法_ル可_レ有_岐政_止志天。道康親王_手立_而。皇太子_止定賜_布。故此之状悟_天。百官人等仕奉_{礼止}詔天皇勅旨_手衆聞食宣。」以_二右大臣從二位源朝臣常_一爲_二皇太子傳_一。左近衛大將如_レ故。參議從四位下安倍朝臣安仁爲_二春宮大夫_一。從五位上藤原朝臣諸成爲_レ亮。正五位下小野朝臣篁爲_二學士_一。
→承和の変によって、恒貞は廃太子された。その後立太子した道康親王の東宮学士に命ぜられる。皇太子傳は源常、春宮大夫は安倍安仁、春宮亮は藤原諸成。篁はかつて恒貞皇太子の東宮学士を勤めた経験があった。

22『続日本後紀』承和九年（842）八月壬申条

壬申。以_二從五位下朝野宿祢貞吉_一爲_二中務少輔_一。從五位下橘朝臣宗雄。從五位下藤原朝臣平雄並爲_二侍從_一。正五位下小野朝臣篁爲_二兼式部少輔_一。東宮學士如_レ故。從四位下茂世王爲_二大學頭_一。從五位下廣宗宿祢糸繼爲_二玄蕃頭_一。大納言正三位藤原朝臣良房爲_二兼民部卿_一。右近衛大將陸奥出羽按察使如_レ故。從五位下橘朝臣海雄爲_二兵部少輔_一。從四位上橘朝臣氏人爲_二刑部卿_一。尾張守如_レ故。正四位下平朝臣高棟爲_二大藏卿_一。從五位下藤原朝臣末繼爲_二大炊頭_一。巨勢朝臣康則爲_二造酒正_一。從四位上源朝臣明爲_二左京大夫_一。從五位下橘朝臣數道爲_二右衛門權佐_一。從四位下田口朝臣佐波主爲_二兼武藏守_一。右京大夫如_レ故。從四位下藤原朝臣貞主爲_二近江權守_一。從五位下下毛野朝臣文繼爲_二信濃介_一。從五位下藤原朝臣大津爲_二陸奥守_一。從五位下久賀朝臣三夏爲_二丹後守_一。外從五位下菅原朝臣梶吉爲_二兼肥後介_一。侍醫如_レ故。
→承和の変による人事において、篁、東宮学士のまま式部少輔を兼官する。

23『続日本後紀』承和十二年（845）正月甲寅条

甲寅。天皇御_二豐樂院_一。宴_二于群臣_一。詔授_二正三位橘朝臣氏公從_二位_一。從五位上石作王正五位下。從五位下安宗王從五位上。正六位上豐井王。仲嗣王並從五位下。從四位上南淵朝臣永河正四位下。從四位下坂上大宿祢清野。无位源朝臣安並從四位上。正五位下小野朝臣篁。伴宿祢成益。藤原朝臣富士麿並從四位下。從五位上清岑宿祢門繼。藤原朝臣岳守。佐伯宿祢利世並正五位下。從五位下笠朝臣數道。百濟王慶世。橘朝臣千枝。久賀朝臣三夏。惟良宿祢貞道並從五位上。外從五位下菅原朝臣梶吉。百濟宿祢河成。无位源朝臣興。正六位上橘朝臣清蔭。藤原朝臣直世。良岑朝臣宗貞。紀朝臣最弟。菅野朝臣高年。藤原朝臣雄瀧。橘朝臣友雄。紀朝臣眞主。和氣朝臣齊之。紀朝臣道茂。橘朝臣岑範。吉備朝臣全繼。中臣丸朝臣氏成。石川朝臣宗我繼。高橋朝臣清野。伴宿祢益雄並從五位下。正

六位上善友朝臣頼主。津宿祢良友。氷宿祢繼麿並外從五位下。日暮賜_レ祿有_レ差。
→篁、從四位下に叙される。(以上、篁の復位復官については史料 37 参照)。

(3) 法隆寺僧法隆寺僧善愷と檀越登美直名の裁判事件

24『続日本後紀』承和十三年（846）五月癸亥条、

癸亥。從四位下東宮學士小野朝臣篁爲_二兼權右中弁_一。從五位下菅野朝臣高年爲_二造酒正_一。外從五位下縣連氏益爲_二勘解由使次官_一。從五位下橘朝臣眞直爲_二右近衛少將_一。從五位下紀朝臣最弟爲_二右兵衛佐_一。從五位下藤原朝臣常永爲_二美濃守_一。

→篁、東宮學士と權右中弁を兼任する。

25『続日本後紀』承和十三年（846）九月壬子条

壬子。從四位下小野朝臣篁爲_二左中弁_一。從四位下藤原朝臣嗣宗爲_二右中弁_一。從五位下藤原朝臣松影爲_二左少弁_一。從五位下橘朝臣伴雄爲_二侍從_一。從五位上藤原朝臣氏宗爲_二式部少輔_一。從五位下豐前王爲_二大藏大輔_一。從五位下滋野朝臣善蔭爲_二宮内少輔_一。從四位上橘朝臣永名爲_二彈正大弼_一。(後略)

→篁、左中弁となる。この直後、法隆寺僧善愷と檀越登美直名の裁判が起こる。
この事件は次のような経緯をもつ。

法隆寺僧善愷が訴える

⇒檀越である登美直名（寺の財産を勝手に処分し、その代金を横領した）



弁官（受理）：筆頭である左大弁は正躬王（参議）

右大弁 和氣朝臣真綱（参議）

左中弁 伴宿祢成益

右中弁 藤原朝臣豊継

左少弁 藤原朝臣岳雄

左少弁 伴善男

〔審査〕 直名が行った寺奴婢や財物の不当な売却・横領額は布 22 端 3 丈に当たり、多大な損害を法隆寺側に与えた

〔主張〕 正躬王は、職制律を根拠に直名を「遠流」にすべきであると主張



〔世論〕 正躬王たちが、善愷のため「私曲」をなした… 議論のすり替え



〔異議申し立て〕 伴善男が登美直名を援引して、異議申し立て

- 論点 (1) 弁官が直接僧侶の訴えを受理したことは、違法である
(2) 犯行の年月日が明記されていない、犯罪の実情の指陳もない訴状を受理したことは、違法である

↓

ドロ沼法廷劇に小野篁が参戦

- 新たな論点の提示 (3) 「私曲相須」の解釈＝弁官の行動は私罪か、否か

↓

〔官議の決定〕 左大臣源常

小野篁と伴善男の言い分が通り（史料 37 下線部 (b)・38 下線部 (a) を合わせて参照）、正躬王・和氣眞綱身・伴成益・藤原豊嗣・藤原岳雄たちは贖罪を命ぜられる（承和十三年十一月太政官符に詳細がみえる）。

26『続日本後紀』承和十四年（847）正月己酉条

己酉。從三位源朝臣定。從四位下小野朝臣篁並爲參議云々。從四位下藤原朝臣嗣宗爲左中弁。從五位上伴宿祢善男爲右中弁。從五位下藤原朝臣冬緒爲右少弁云々。（後略）

→篁、源定と共に参議になる。前述の訴訟事件での手腕を買われたと考えられる。右中弁には伴善男が拔擢される。

27『続日本後紀』承和十四年（847）四月丁巳条

丁巳。以從四位下小野朝臣篁爲彈正大弼。從四位上橘朝臣永名爲神祇伯云々。

→篁、彈正大弼となる。

28『続日本後紀』承和十五年（848・嘉祥元年）正月甲戌条

甲戌。天皇御紫宸殿。以參議從四位下小野朝臣篁爲左大弁。兼信濃守勘解由長官如故。中納言從三位安倍朝臣安仁爲兼民部卿。春宮大夫如故。參議從四位上藤原朝臣長良爲左衛門督。參議從四位上藤原朝臣助爲兼左兵衛督。「彈正大弼」下野守如故。從五位下佐伯宿祢雄勝爲右馬頭。（後略）

→篁、左大弁に進む。信濃守と勘解由長官を兼任する。右大弁は中納言・春宮大夫安倍安仁。

(4) 嘉祥改元

29『続日本後紀』承和十五年（848・嘉祥元年）二月癸巳条

癸巳。參議從四位下小野朝臣篁爲班山城田使長官。散位從五位下文室朝臣有眞爲次官。參議從四位下伴宿祢善男爲班河内和泉田使長官。散位從五

位下藤原朝臣近主爲二次官一。

→**篁、班山城田使長官**となる。次官は文室有真である。山城国だけでなく河内・和泉国にも班田使（長官は伴善男）が派遣される。

30『続日本後紀』承和十五年（848・嘉祥元年）四月壬辰条

壬辰。地震。以參議從四位上藤原朝臣助爲二彈正大弼一。左兵衛督如レ故。參議從四位下小野朝臣篁爲二兼勘解由使長官一。左大弁信濃守如レ故。

→**篁、勘解由使長官**に任じられる。左大弁と信濃守は兼任。

31『続日本後紀』承和十五年（848・嘉祥元年）六月庚寅条

庚寅。（中略）是日。左大臣從二位兼行左近衛大將皇太子傳臣源朝臣常。正三位守右大臣兼行右近衛大將臣藤原朝臣良房。大納言正三位臣源朝臣信。中納言從三位臣源朝臣弘。中納言從三位兼行民部卿春宮大夫臣安倍朝臣安仁。參議從三位行中務卿兼尾張守臣源朝臣定。班大和國田使長官參議從四位上式部大輔臣滋野朝臣貞主。班攝津國田使長官參議從四位上行左兵衛督兼彈正大弼下野守臣藤原朝臣助。參議從四位上行左衛門督臣藤原朝臣長良。參議從四位上行右衛門督臣橘朝臣岑繼。班山城國田使長官參議從四位下守左大弁兼勘解由長官行信濃守臣小野朝臣篁。參議左近衛中將從四位下臣藤原朝臣良相。班河内和泉國田使長官參議從四位下守右大弁臣伴宿祢善男等上表言。「臣聞。潛化既兆。理至則形。玄感雖昧。在幽必レ顯。德之所レ極。靈祇不レ能レ秘二其福一。道之所レ格。川岳無レ愛二其寶一。故盛水銜レ符之瑞。跡昇二軒壇一。媯淵負レ圖之祥。光浮二堯渚一。伏惟 皇帝陛下。德冠二神表一。道軼二帝光一。握二金鏡一而照臨。惣二環瀛一而富有。惇レ睦辯レ章之意。晷食兢レ懷。寧レ人濟レ俗之心。夕惕興レ慮。垂二仁愛於万物一。施二慈育於群生一。寔寓無レ虞。表裏清謐。伏見二大宰大貳從四位上紀朝臣長江等奏一稱。所管豐後國大分郡擬少領膳伴公家吉。於二同郡寒川石上一。獲二白龜一枚一。經二千里之荒徼一。入二九重之震闈一。出自二篋匱一。放二于庭墀一。既在二盼睞一。豈因二敷奏一。質類二凝霜一。形同二搏雪一。天憑二異物一而致二瑞一。欲レ蟄而還出。地假二殊形一而見レ符。在二涅而不レ緇。實曠古之嘉貺。希代之偉觀也。謹案。『礼含文嘉』云。外内之制。各得二其宜一。則山澤出二靈龜一。『孝經援神契』云。王者德澤洽。則神龜來。孝道行則地龜出。『熊氏瑞應圖』云。王者不レ偏不レ黨。尊二用耆老一。不レ失二故舊一。德澤流洽。則靈龜出。『後魏書』曰。冀州獻二白龜一。王者不レ私人レ以官。尊レ耆任レ舊無レ偏無黨之瑞也。陛下帝德王功巍巍々如レ彼。靈符嘉應之光如レ此。千歲一至之祥。沓二前王之矩一。邈古惟新之會。重二列聖之規一。依二據圖謀一。實合二大瑞一。加以。龜生二於金一而遊二於火一。今生得二其正一。自二金方一而來輪。遊不レ愆レ時。在二火候一而入貢。未レ有二下色將レ方叶一。時与二正符一。如レ此之奇上也。諧二天之氣一。食二土之毛一。莫レ不二魚躍躍鳥飛抃一。

舞皇極。況臣等叨竊_二纓冕_一。忝列_二台衡_一。荷_レ恩既深。情異_二凡百_一。不_レ任_二誠慶之至_一。謹詣_二闕庭_一。奉表賀聞。」

→天候不順。日本各地で天災。大宰府から前月に献上された白亀を祥瑞とするべきと左大臣源常以下臣下が仁明天皇に上表した。これをもって、6月13日に承和を改め、年号を嘉祥とする。

32『続日本後紀』嘉祥二年（849）正月壬戌条

壬戌。天皇御_二紫震殿_一。覽_二青馬_一。宴_二群臣_一。詔授_二无品恒貞親王三品_一。无品本康親王四品。正三位藤原朝臣良房從二位。從四位上橘朝臣岑繼從三位。從四位下小野朝臣篁從四位上。從四位上高枝王正四位下。无位貞内王從四位下。從四位下豐江王從四位上。正五位下有雄王從四位下。從五位下並山王從五位上。无位安原王。正六位上利見王並從五位下。无位源朝臣勝。源朝臣多並從四位上。從五位上藤原朝臣行道正五位下。從五位下藤原朝臣常永。伴宿祢諸野。橘朝臣眞直。高階真人岑緒並從五位上。外從五位下秦忌寸福代。榎井朝臣嶋公。无位在原朝臣業平。正六位上良岑朝臣清風。藤原朝臣吉備雄。藤原朝臣長基。藤原朝臣虎主。田口朝臣岑永。紀朝臣全法。笠朝臣岑雄。藤原朝臣直道。橘朝臣數岑。橘朝臣岑緒。丹・真人弟梶。賀茂朝臣弟岑。文室朝臣壘田麿。大春日朝臣眞野麿。縣犬養宿祢氏河。當麻真人鴨繼。御春朝臣眞濱並從五位下。正六位上蕃良朝臣豐持。高岳宿祢宗雄。上毛野朝臣綱主。百濟宿祢康保。大秦公是雄並外從五位下。宴竟賜_レ祿有_レ差。

→正月、白馬節会にて篁は從四位上に叙せられる。

(5) 渤海使の対応

33『続日本後紀』嘉祥二年（849）五月乙丑条

乙丑。遣_二參議從四位上小野朝臣篁_一。右馬頭從四位下藤原朝臣春津。少納言從五位下藤原朝臣春岡。右少弁從五位上橘朝臣海雄。左少史正六位上大窪益門。少内記從七位下安野宿祢豐道等於鴻臚館。賜_二勅書并太政官牒_一。此日。客徒歸却。

勅書曰。「天皇敬問渤海國王。入貢使文矩等至。省啓具之。惟王敦志欽仁。宅心懷德。飛颿不斷。望日域而忘遐。貢篚相尋。想遼陽而如近。眷其勤苦。良嘉乃誠。但脩聘之期。一紀爲限。先皇明制。國憲已成。故有司固請責文矩等。以背彝規。自邊還却。朕閱其匪躬之故。遠踏重溟。船破物亡。人命纔活。使得入奉朝覲拜首軒墀。祿賜榮班。准憑恒典。斯乃_二切之恩_一。難可再恃。王宣守舊章而不失。昭明德以有垣。唯存信順之心。誰嫌情禮之薄。夏熟。比清適也。文矩今還。略申往意。并寄王信物如別。」

太政官牒曰。「日本國太政官牒渤海國中臺省。入覲使永寧縣丞王文矩等壹百人

牒。得中臺省牒稱。邈矣兩邦。阻茲漲海。契和好於永代。寄音書於使程。頃者兩邦通使。一紀爲期。音耗稀傳。戀懷空積。所以勿待紀盈。申憑舊准。謹差永寧縣丞王文矩。令覲貴國者。少之事大。理難自由。盈縮期程。那得在彼。事須在所却還戒其愆違。官具狀奏聞。奉勅。文矩等孤舟已破。百口纔存。眷其艱辛。義深合宥。宣特賜恩隱聽奉入覲。爵賜匹段。准據舊章。但權時之制。不可通行。詳告所司。莫令重違者。准處分。覲礼伝畢。仍造舟船。及時發遣。附勅璽書并國信。今以狀牒。々至准狀。故牒。」

→篁は、藤原春津・藤原春岡、橘海雄、大窪益門、安野豊道等と共に鴻臚館に遣わされ、4月に入京した渤海国使節・王文矩らの対応にあたる。

(6) 仁明朝から文徳朝へ

34『文徳実録』嘉祥三年（850）四月甲子条

甲子。帝_一即位於大極殿_一。其日晨旦快雨。百官以_一雨日儀_一從事。至_一日中_一時天晴。（中略）授_一從二位源朝臣常正二位_一。正三位源朝臣信從二位。從三位源朝臣定。安倍朝臣安仁等正三位。從四位上滋野朝臣貞主。藤原朝臣助。藤原朝臣長良。小野朝臣篁。藤原朝臣良相等正四位下。從四位下伴宿祢善男從四位上。无位雄風王。利基王等從四位下。從四位上坂上大宿祢淨野正四位下。從四位下清原真人瀧雄從四位上。正五位上伴宿祢成益。正五位下春澄宿祢善繩等從四位下。從五位上藤原朝臣良仁正五位上。從五位上藤原朝臣高房。從五位下菅原朝臣是善等正五位下。從五位下鎌倉王。藤原朝臣春岡。文室真人助雄。良岑朝臣長松。藤原朝臣関主。橘朝臣清蔭。佐伯宿祢屋代。外從五位下豊階公安人等從五位上。外從五位下都宿祢貞繼。三統宿祢眞淨。正六位上在原朝臣善淵。大原真人眞室。小野朝臣貞樹。橘朝臣休蔭。齋部宿祢伴主。安倍朝臣有道。從六位上藤原朝臣諸藤等從五位下。正六位上廣宗宿祢平麻呂。榎井朝臣嶋長。家原朝臣氏主等外從五位下。

→文徳天皇の即位により、滋野貞主らと共に正四位下に叙される。文徳が東宮時代に東宮傅の源常、東宮学士を勤めたのが小野篁のほか菅原是善・豊階安人である。春宮大夫は安倍朝臣安仁、春宮亮は藤原良仁であった（下線）。

35『文徳実録』仁寿元年（851）正月甲申条

甲申。（中略）參議正四位下小野朝臣篁爲_一近江守_一。參議正四位下藤原朝臣助爲_一信濃守_一。左兵衛督如_レ故。參議從四位上伴宿祢善男爲_一美作守_一。中宮大夫式部大輔如_レ故。（下略）

→篁、正月の県召において左大弁を兼ねて近江守に任命される。その後、病を得てすべての官職を持して療養に入る（史料 37 参照）。

36『文德実録』仁寿二年（852）十二月庚辰条

庚辰。加_二左大弁正四位下小野朝臣_一篁從三位_一。

→篁、從三位に列する。文徳天皇からお見舞いが遣わされた。

37『文德実録』仁寿二年（852）十二月癸未条

癸未。參議左大弁從三位小野朝臣_一篁薨。

篁。參議正四位下岑守長子也。岑守。弘仁之初爲陸奥守。篁隨父客遊。便於據鞍。後歸京師。不事學業。嵯峨天皇聞之。歎曰。既爲其人之子。何還爲弓馬之士乎。篁由是慚悔。乃始志學。十三年春奉文章生試及第。天長元年拜巡察彈正。二年爲彈正少忠。五年遷爲大内記。七年爲式部少丞。九年授從五位下。拜大宰少貳。有詔不許之官。其夏喪父。哀毀過礼。十年爲東宮學士。俄拜彈正少弼。(a) 承和元年爲聘唐副使。明年春授從五位上。兼備前權守。數月拜刑部大輔。三年授正五位下。五年春。聘唐使等四船。次第泛海。而大使參議從四位上藤原常嗣所駕第一船。水漏穿缺。有詔以副使第二船。改爲大使第一船。篁抗論曰。朝議不定。再三其事。亦初定船次第之日。擇取最者爲第一船。分配之後。再經漂廻。今一朝改易。配當危器。以己福利代他害損。論之人情。是爲逆施。既無面目。何以率下。篁家貧親老。身亦疴瘵。是篁汲水採薪。當致匹夫之孝耳。孰論確乎。不復駕船。近者。太宰鴻臚館。有唐人沈道古者。聞篁有才思。數以詩賦唱之。每視其和。常美艷藻。六年春正月遂以捍詔。除名爲庶人。配流隱岐國。在路賦謫行吟七言十韻。文章奇麗。興味優遠。知文之輩。莫不吟誦。凡當時文章。天下無雙。草隸之工。古二王之倫。後生習之者。皆爲師摸。七年夏四月。有詔特徵。八年秋閏九月叙本位。十月任刑部大輔。九年夏六月爲陸奥太守。秋八月入拜東宮學士。其月兼式部少輔。十二年春正月授從四位下。(b) 于時法隆寺僧善愷告少納言登美真人直名爲寺檀越枉法狀。訴之太政官。官加訊鞫。漸將讞斷。而世論嗷々。爲善愷成私曲。由此。朝廷更論此事。延至分爭。名例律私曲相須之義。或以爲一。或以爲二。弁官上下。還罹其網。遂令明法博士讚岐朝臣永直考之。考曰。私曲兩字。混處一科。是相須之義也。當今之事。只有一犯。不足結罪。事未斷畢。十三年五月爲權左中弁。新關其事。即據律文。以爲。私与曲明是二也。若私若曲。有一於此。未免其罪。而連涉日月。不肯決斷。仍上請議定私曲律義之表。并所執狀以糺法家之不熟律義。明弁官之可處私罪。篁初恨此論之不平。作傷時詩卅韻。寄參議滋野朝臣貞主。後重令諸儒傍議。其文曰。被右大臣宣稱。奉勅據參議小野篁朝臣上表及所執律文。議定可考申。謹依宣旨。覆案律文。公罪謂緣公事致罪而無私曲者。疏云。私曲相須。公事与奪。情無私曲。雖違法式。是爲公坐云云。私罪條疏云。私罪謂不緣公事私自犯者。雖緣公事。意涉阿曲。亦同私罪者。由此案之。私者不緣公事。自犯之名。曲者雖緣公事。意涉阿曲之謂也。相須則私与曲。二事相待之理。然則無私無曲。可爲公罪。一私一曲。不免私罪。

而永直等説云。私曲者謂私之曲相須者。合私曲兩字爲一義。以連讀之意云云者。文義相錯。公私不分。此説之迂。難可據信。篁朝臣所執。誠爲允陋。九月遷左中弁。十四年春正月爲參議。四月兼彈正大弼。十五年春正月轉左大弁兼信濃守。夏四月又兼勘解由長官。仁壽二年春正月轉左大弁餘皆如故。明年春正月加從四位上。夏五月以病辭官歸家。三年四月加正四位下。仁壽元年春正月遙授近江守。明年春病瘳。復爲左大弁。後又病發不朝。天皇深爲矜憐。數遣使者。趁視病根。賚賜錢穀。冬十二月就家。叙從三位。及困篤。命諸子曰。氣絕則殮。莫令人知。薨時年五十一。篁身長六尺二寸。家素清貧。事母至孝。公俸所當。皆施親友。

→小野篁、薨去。享年 51 歳であつた。薨伝については前稿参照。

(7) かかわりのあつた人びと

38『三代実録』貞觀五年（863）五月癸亥朔条

五月癸亥朔。參議刑部卿正四位下兼行越前權守正躬王卒。

正躬王者。贈一品萬多親王之第七子也。幼而聰穎。入學齒曹。涉讀史漢善屬文。年十八奉文章生試及第。（中略）十二年。法隆寺僧善愷告少納言兼侍從從五位下登美真人直名爲寺檀越枉法狀。太政官加訊鞠讞之。而時論縱橫云。正躬等爲善愷成私曲。于時從五位下守右少辨兼行讃岐權介伴宿祢善男執律私曲相須之義。不平正躬等之論此事。分爭遞成矛盾。事下勘解由次官外從五位下兼守大判事行明法博士讃岐朝臣永直考之。永直考云。私曲兩字。混處一科。是相須之義也。善男確執以爲。私之与曲。明是也。當時有識式部少輔從五位下小野朝臣篁同善男之論。遂緣受推善愷違法訴狀。官當解任削爵一階。從四位下行左中弁兼守大藏大輔伴宿祢成益。從五位上守右中弁藤原朝臣豐嗣。從五位下守左少弁兼左衛門佐藤原朝臣岳雄等。共坐此事解官削爵。前史詳之。故不委載焉。（中略）今年二月除刑部卿。兼越前權守。卒於官。時年六十五。

→正躬王卒伝。正躬王は桓武天皇皇子万多親王の子である。法隆寺僧善愷裁判事件における篁の様子がうかがえる（下線部）。

39『三代実録』貞觀八年（866）九月廿二日甲子条

廿二日甲子。（中略）是日。大納言伴宿祢善男。善男々右衛門佐伴宿祢中庸。同謀者紀豐城。伴秋實。伴清繩等五人。坐燒應天門當斬。詔降死一等。並處之遠流。善男配伊豆國。中庸隱岐國。豐城安房國。秋實壹岐嶋。淨繩佐渡國。相坐配流者八人。從五位上行肥後守紀朝臣夏井配土左國。從五位上行下野守伴宿祢河男能登國。上総權少掾正八位上伴宿祢夏影越後國。伴冬滿常陸國。紀春道上総國。伴高吉下総國。紀武城日向國。伴春範薩摩國。（中略）

善男。是國道之第五子也。生而爽俊。天資鬼脉。見之「見」者皆曰兒。爲人奇。深眼長鬚。身軀細。意氣半岸。弱冠入直校書殿。侍奉仁明天皇。稍被知寵。任

寄日重。承和八年爲大内記。(中略)(a)嘗承和中。爲右少弁之時。法隆寺僧善。向官告檀越少納言登美真人直名所犯之狀。參議左大弁正躬王及傍官与善男爭論律私曲相須之義。縱不一。分背舛馳。遂誣正躬王等許容善違法之訴。令明法博士讃岐朝臣永直等斷之。永直所執不同善男。左大弁正躬王及左中弁伴宿祢成益。右中弁藤原朝臣豐嗣。左少弁藤原朝臣岳雄。明法博士永直等遂坐解官。貞觀之初。與左大臣源朝臣信有隙。數年之後。誣告大臣謀爲反造。殆欲陷害其後犯大造之罪。子自絶于天。積惡之家必有餘殃。蓋斯之謂歟。

夏井者。左京人。美濃守從四位下善岑之第三子也。夏井眉目疎朗。身長六尺三寸。性甚温仁。雅有才思。(b)承和初。以善隸書。侍詔於授文堂。就參議小野朝臣篁。受用筆之法。篁歎曰。紀三郎可謂眞書之聖也。文德天皇即位。詔徵見之。夏井衣履疎弊。左右見者咸笑之。上曰。是疲駿也。非汝所知。遂有殊寵。(中略)天安二年八月文德天皇晏駕。夏井出爲讃岐守。政化大行。吏民安之。境内翕然。不忍相欺。秩滿將歸。百姓相率。詣闕乞留。因欺更留二年。黎庶殷富。倉廩充實。於是新造大藏於土郡。惣册字。皆納以爲不動之蓄。及去吏民送別者贈遺甚多。夏井一無所受。歸都之後。米完玩好以送其家。夏井唯留紙筆。悉返其餘。貞觀七年拜肥後守。母石川氏聞而哭之。人問其故。曰。吾聞。肥後風俗。國宰至清。身必不全。吾子其不終乎。有異母弟豐城。夏井以其放誕。數加督責。豐城苦之。遂託身大納言伴宿祢善男。應天門火。善男坐。以男中庸行火燒之。善男應知之焉。豐城爲善男之從。夏井爲豐城之兄。轉相緣坐。被處遠流。夏井隨使出境。肥後民庶遮路悲哭。如喪考妣。夏井私歎曰。凡法律所謂首從之坐。必有差降。予是從之兄。亦緣坐也。今与善男同配遠流。何其無別哉。向土左路。過讃岐境。百姓男女老少。皆弃其室。逢迎道路。數十里之間。哭聲相接。數年母亡。夏井至孝冥發。居喪過礼。建立草堂。安置骸骨。晨昏之礼。無異生時。本自崇信佛理。至是於草堂前。每日讀大般若經五十卷。以終三年之喪。夏井兼能雜藝。尤善圍碁。伴宿祢少勝雄以善奕碁。延曆聘唐之日。於使員。以碁師也。嘗善岑爲美濃守。少勝雄爲介。夏井時年十餘歲。習圍碁於少勝雄。一二年間。殆超于少勝雄。又善射覆。文德天皇與宮人。爲藏鉤之戲。一鉤藏在百手之中。密令夏井筮之。蓍布卦曰。有小女着青衣。以白花首者。鉤在其左手中。帝乃探得大悅焉。又閑醫藥之道。配土左之後。自往山澤採藥。合練以施民。々多得其驗。嘗有一人。中風被髮狂走。夏井与一匕散藥御。以令服之。此人立癒。皆此之類也。

→応天門の変の最終的な処罰決定。伴善男の伝には、法隆寺僧善愷訴訟事件の記述が見える（下線部 (a)）。紀夏井の伝には、篁が夏井の書の師匠であったことが見える（下線部 (b)）。

40『三代実録』元慶四年（880）八月卅日辛亥条

卅日辛亥。参議従三位行刑部卿菅原朝臣是善薨。云々。

父清公、学芸博通、才德甚高。弱冠挙試、為文章生。尋挙秀才、对策登科。延暦年中、為遣唐使。復命之後、累歴頭要、爵至三位、猶為文章博士。以其為儒門之領袖也。有四子。是善、第四之子。是善、幼而聰穎、才学日新。弘仁之末、年甫十一、徵侍殿上、常雄帝前、讀書賦詩。廿二補文章得業生、其後文章博士・東宮学士・大学頭・式部大輔、相次補任。貞觀十四年八月、拜参議、式部大輔尚兼之。元慶元年、遷刑部卿。勘解由長官近江守如故。三年十一月授受三位。薨時年六十九。是善。藻思華瞻、声価尤高。小野篁詩家之宗匠、春澄善繩・大江音人、在朝之通儒也。並以文章相許焉。上卿良吏、儒士詞人、多是門弟子也。天性少事、世体如忘。常賞風月、樂吟詩。最崇仏道、仁愛人物。孝行天至、不好殺生。臨終之夕言。四命絶根、不及孟冬悔過之期、今日雖死至彼月、為我修功德耳。一言而止、更无他語。是善、撰文徳天皇実録十卷、文章博士都良香預之。又自撰東宮説韻廿卷、銀榜輪律十卷、集韻律詩十卷、会文類集七十卷。又有家集十卷。

→菅原是善の薨伝。篁が是善の詩歌の師匠であつたことが見える。春澄善繩・大江音人など著名な学者にも師事していた。

【表】 小野篁 年譜

年月日			天皇	皇太子	出来事	史料番号
延暦 21	802		桓武	安殿	篁 誕生	37
弘仁 12	821	春	嵯峨	大伴	文章生試及第	37
13	822	9			文章生として出身	37
天長元	824	9	淳和	正良	巡察彈正	37
2	825	3			彈正少忠	37
5	828	8			大内記	37
7	830	正・			藏人	37
		2			式部少丞	37
9	832	正・			従五位下（入内）	37
		正・11			太宰少弐（父喪に服する）	37
10	833	3・13	仁明	恒貞(立)	春澄善繩と共に、東宮学士に着任	37
		3・24			彈正少弼へ転出	37
承和元	834	正・13			美作介	37
		正・19			遣唐副使に任命（承和の遣唐使）	1
2	835	正・7			従五位下→従五位上	2
		正・11			備前権守	3
		12・2			遣唐使たちに借位（篁・正五位下）	4
3	836	正・7			従五位上→正五位下	5
5	838	6・22			遣唐使船出帆するも度々漂流・遭難→副使篁、大使藤原常嗣と対立し、乗船を拒否	6～14
		12・15			篁、隠岐国へ流罪	15・16
7	840	2・14			召喚 →（6・17）入京	17・18
8	841	閏9・11			無位 → 正五位下に復位	19
		10・15			刑部少輔	20
9	842	6・			陸奥守	37
		8・4		道康(立)	承和の変 →東宮学士に着任	21
		8・11			兼式部少輔	22
12	845	正・7			正五位下→ 従四位下	23
13	846	5.13			兼権右中弁	24
					◎この頃、法隆寺僧善愷訴訟事件	37・38・39
14	847	9・14			左中弁	25
		正・12			参議	26
		4・23			彈正大弼	27
		正・13			左大弁兼信濃守	28
15	848	2・3			班山城田使長官に任命	29
		4・3			勘解由使長官、兼左大弁・信濃守	30
		6・3			長雨。祥瑞を公卿上表→嘉祥と改元	31
		正・7			従四位下→ 従四位上	32
嘉祥 2	849	5・12			鴻臚館（渤海使）への使者となる	33
3	850	4・17	文徳	惟仁	従四位上→ 正四位下	34
仁寿元	851	5・			病のため、左大弁を停止	37
		正・11			参議、近江守	35
2	852	正・10			左大弁に復活	37
		12・19			正四位下→ 従三位	36
					病重く、文徳天皇が使者を派遣して賜銭	37
		12・22			薨去	37